

寄稿

マネジメント学部創設の経緯

The Details of the Establishment of the Faculty of Management

初代マネジメント学部長・大学院マネジメント研究科長

The First Dean of the Faculty of Management and the Dean of the graduate school of
Management

山本 貞雄

Sadao YAMAMOTO

早いもので、跡見学園女子大学にマネジメント学部が創設されてから、今年で10周年を迎えることになった。

私が初代学部長を務めたことから、マネジメント学部創設の経緯を書くようにと要請された。

私は京都の大学を卒業してから、すぐに今の総務省に入省した。

入省して、1年目に、国連のフェロウシップの試験に合格して、渡米することになった。最終の身体検査には、アメリカ大使館の医者が立ち会った。私が22歳の頃である。時は、1957年である。

アメリカでは、フーバー元大統領にお会いして、アメリカにおける行財政改革の動向を聴取する予定になっていた。そのため、川島正二郎副総理からフーバー元大統領宛ての親書とお土産として、ガラスケース入りの藤娘の人形を持たされた。田舎のお兄ちゃんながらである。

羽田飛行場で、DC8に搭乗したが、当時、我が国では、飛行機は今のよう便利でなかったから、途中ハワイのホノルル空港に立ち寄り、ロスアンジェルス空港についた。

ここで、フーバー元大統領について紹介しておく、フーバー元大統領は、大統領時代はそう成果を上げた方ではなく、むしろ大統領を辞めてから、数次にわたる連邦政府の行財政改革で大きな成果を上げ、有名になった方である。

ニューヨークの日本の総領事館によって、フーバー元大統領の居場所を聞いたら、国連の近くのチューダーホテルの9階だった。秘書の案内でフーバー元大統領にお会いしたが、立派な広々とした大理石の部屋の机の前の皮の椅子に座っておられ、私がたどたどしい英語で挨拶をすると、立ち上がって握手をされ、川島正二郎副総理の元大統領宛ての親書とお土産を受け取って、

大変喜ばれた。

フーバー元大統領の横には、既に彼の事務局長であるマクニール氏が控えていた。

フーバー元大統領は、さすがは元大統領だけあって威厳があったが、白髪の如何にも人柄の良さそう方であった。

フーバー元大統領から、連邦政府の行財政改革について、色々伺ったが、事業の民営化の問題、規制改革、総合調整機構の問題等多岐にわたっていた。

別れ際にマクニール事務局長は、グッドバイ、ボス！といていた。

そのあと、マクニール事務局長に、ニューヨークのアスレティック・クラブで、昼食をご馳走になりながら、更に詳しく連邦政府の行財政改革について、お話を伺った。

ホテルに戻ってから、連邦政府の行財政改革について、これまで聞いたことを整理した。

帰途、ワシントンで、行政管理予算庁・健康教育福祉省・農務省・商務省等を訪れ、連邦政府の行財政改革の実情を調査した。ワシントンでは、マッコンキアと言う大変親切なおばさんの家に下宿した。

予定に沿って、ワシントンから、車でペンシルバニア州の首都のピッツバーグに行き、ウォールドフ・アストリア・ホテルに入った。

ピッツバーグでは、半年間、ピッツバーグ大学の大学院研究所の行政研修に参加した。この行政研修には、各国から研修生が参加しており、お互いに友人になり、楽しい思い出となった。

帰途、ピッツバーグ大学の大学院研究所長の勧めで、ロスアンゼルス大学のロスアンゼルス大学南校に行き、1週間ばかり過ごした。ある時、男ばかりの学生と大きなテーブルを囲んで、話しあっていたら、女性の学生が来た。男の学生全員が立ち、その時、「ミスター・山本はどうして立たないのか。」と言ったので、私は慌てて立ち上がった。レディーファーストはこの時、身に着いた。日本に帰って、役所のエレベータに乗る時、女性の職員に先を譲ったら変な顔をしていた。跡見女子大学では、今では、バスに乗る時は、ごく自然に女性の先生には先を譲っている。

私は、帰途、ヨーロッパを回り、パリにて、国立行政学院等を調査した。特に、国立行政学院は官僚になるエリートを育てる機関である。

話が、それてしまったが、これから本論に入ろう。

帰国後、私はすぐ、元帥と言うあだ名の木村大臣の大臣秘書官になった。私はこの大臣に大変可愛がられた。私は、それから間もなく、今の総務省の官房秘書課長になった。当時の大臣は、後の中曽根康弘総理であった。中曽根康弘大臣は、時代の趨勢に対する感がよく、直ちに、法律を作って行財政改革と取り組むことにした。そして、私は、官房秘書課長から、臨時行政調査会の事務局長に命じられた。中曽根康弘大臣は、臨時行政調査会の会長に経団連会長の土光敏夫氏を引っ張り出すことに成功した。土光さんは、臨時行政調査会の会長を引き受けるに当たって、①政府は、臨調の答申をそのまま実行すること、②増税なき財政再建を実行すること、③3K赤

字（食管赤字・国鉄赤字・健康保険赤字）を解消すること、④地方分権を実施すること、⑤政府事業の民営化を実施すること等を迫った。中曽根康弘大臣は、その場で、これを約束するとともに、正式には、その日の夕刻に、官邸の鈴木総理と連絡をとり、直接電話で土光さんと鈴木総理が話し合い、このことを確認した。土光さんは、以降、このことを男の約束と言っておられる。

鈴木内閣は、早速、臨調に、増税なき財政再建による翌年度の予算編成の考え方について、緊急に答申するよう求めてきた。臨調は、予算編成に関する特別委員会を設置し、45日以内に答申することとし、私はこの特別委員会の事務局を担当した。答申案を作成するに当たっては、主計局長と組んで、全主計官に原案を出してもらうことに成功した。各種政策の変更、補助金の削減等々である。特別委員会にこの原案を出して、了解をとった上で、特別委員会の委員長（亀井住友電工会長）と私と主計局次官が出て、順次、各省の事務次官・官房長・会計課長と会い、原案について、一切修正は行わないことを条件に、話し合った。おかげで、全て原案通り、纏まった。

しかし、間もなく、鈴木総理は、増税なき財政再建による予算編成の実施や、国鉄改革等の実施が苦しくなり、総理を辞し、中曽根さんに総理の座を譲った。中曽根さんは、国鉄改革については、抵抗する国鉄総裁に辞表を提出させる等の荒療治を行った。また、韓国と問題になっていた賠償問題については、陸大金時計組みの秀才の瀬島龍三氏を密使に活用し、金額については、竹下大蔵大臣に指示して、瀬島龍三氏と相談させ、全斗煥韓国大統領との間で予め実質的な話をつけさせ、その後、正式に韓国大統領に会って、話を決着させた。

そして、1月早々に、訪米し、レーガン大統領に会い、ロン・康関係を確立し、日米関係を確固たるものにした。おかげで、中曽根内閣は、5年間の長期政権となった。そして、行財政改革と日米外交等で多くの業績を挙げた。

中曽根内閣の総辞職後、私は池田勇人総理の娘婿の池田光彦大臣の時に、総務事務次官に就任した。

総務事務次官退任後、瀬島龍三氏の紹介で、私は京セラの稲盛会長に招かれて、1990年から2000年までの間、京セラ株式会社代表取締役・専務に就任し、この間、経営企画室長、法務、環境、東京本部長、京セラオプティック代表取締役・社長、京セラマルチメディアコーポレーション代表取締役・社長等を担当または兼務した。

そして、その後、跡見学園女子大学で、山崎一穎学長を委員長に、北大法学部長であった伊藤大一先生や後に大臣になられた大田弘子先生等が、マネジメント学部を創設すべく、検討会を持っておられたが、私は公共経営と企業経営の両方を経験していることから、その場に招聘され、検討に加わった。

私は、検討会で、実学教育として、2年生全員のインターンシップ制度を提案したが、文科省が、「数%のインターンシップはあるが、全員は聞いたことがない。それでは、全員のインターンッ

シップを引き受けてくれる企業等の承諾書を取って下さい。」と言われた。私は土光臨調で、多くの民間企業の人を知っており、自信があったので、跡見純弘理事長が自動車を出して下さり、2週間で全員分の承諾書を取った。

また、検討会で、2年生全員が一泊で、新潟に旅行する件について、プラトンのアカデミアに因んで跡見アカデミアと名付けることを提案したら、大田弘子先生が直ちに賛成された。

私は、その場で、伊藤大一先生や皆様の推挙によって、マネジメント学部長に就任することが決まった。マネジメント学部の先生には、実学が売り物であるので、検討会のメンバーの先生方の推薦や私が臨調の事務局長時代にお付き合いを持った民間の委員の方々に、紹介戴き、今のマネジメント学部長の山澤さんのように日経新聞社の研究所の出身者等実学の分野の人に集まってもらった。

以上が、マネジメント学部創設の経緯である。マネジメント学部が、4年経つと、自動的に、大学院の修士課程を設けることとなり、私が研究科長に就任した。

その後、マネジメント学部も分化して、マネジメント学科と観光マネジメント学科と生活環境マネジメント学科が置かれた。

なお、幸い、マネジメント学部の各科は実学教育や実学の教員を揃えたことが評価され、優秀な生徒が定員を上回って応募してきている。

最後に、以下に、総括して、

「跡見学園女子大学マネジメント学部の教育理念と教育方法」を記述する。

(教育理念)

跡見学園女子大学マネジメント学部は、21世紀の社会における企業・公共・文化のマネジメントの基幹的分野で意思決定のできる、専門的知識と技能を備えた、優れた女性の人材を育成することを使命とする。

このため、教養教育においては知性のインフラとしての問題発見解決能力を含む思考力・コミュニケーション力・構想力を涵養し、幅広い教養を身に着けさせることとし、専門教育においては企業・公共・文化の活動とマネジメントに関する最先端の理論教育と実学教育を行い、人格面においては豊かな人間性教育を行う。

マネジメント学部は、まさに、学祖跡見花蹊が1875年に掲げた「時代の急速な進展に応ずる知識・技能の修得」と言う教育理念を、21世紀に於いて実践しようとするものに他ならない。

(教育方法)

1. 自身の将来の夢や進路を実現するため適切なカリキュラム学習を行わせることとし、その前提として、学生が自らの興味や関心や才能に基づいた将来の夢や進路を早期に見つけ得よう、教員によるキャリアアドバイザー制度や各界のリーダーによる経験談の講演等を通じて支

マネジメント学部創設の経緯

- 援する。
2. 企業・公共・文化の3つのマネジメント・コース別基本的履修モデルに加え、将来の主要進路コース別基本的履修モデルを用意し、これを参考に学生が適切な自らの履修計画を作成し得るよう教員によるアカデミックアドバイザー制度を通じて指導する。
 3. キャリアアドバイス及びアカデミックアドバイスは、何れも専門教員の指導の下に、専門教員が行うこととし、1年次においては入学後直ちに行う ATOMI アカデミアにおけるディスカッショングループを指導単位として行う。年次の進行に応じ、キャリアアドバイス及びアカデミックアドバイスは、各種資格試験を含め大学の就職支援活動と相互に密接な連携の下に行うものとする。
 4. 知性のインフラの涵養に当たっては、特に国際社会で通用する英語力と実社会で通用するIT力の教育を重視する。
 5. 専門科目の理論科目では、ニューパブリックマネジメント論に代表される最先端の企業・公共・文化の活動とマネジメントに関する理論教育を行う。
 6. 実践ゼミナールにおいては、最先端の企業・公共・文化の活動とマネジメントに関するケーススタディーやインターンシップや模擬体験や研究レポートの取りまとめを含む実学教育を行い、実社会で有効な実践力を鍛える。
 7. ボランティア論の講義やボランティア体験や学園祭等の課外活動等を通じて、利他の精神を備えた人間性豊かな人格形成を図るとともに、危機管理教育や健康管理教育を含む賢明な社会生活のための教育を行う。
 8. FDの実践を含め、常に学部全体の教育の質と研究の質の向上を目指す。
 9. 将来にわたり、国際交流と国際化教育の充実を目指す。
 10. 将来にわたり、エクステンションカレッジや学部への社会人の受け入れ等社会への貢献を目指す。